お　名　前	性　別	終戦時の年齢	現 住 所
鈴木 貴美子 （旧姓　安井）	女　性	１７歳	新城市豊岡 （長篠 富保）

「高女から工廠へ　紙一重でつないだ命」

作法室前で　貴美子さん提供

私の家は当時の長篠村富保で，田口線の鉄橋の下を通って本長篠まで歩き，電車で新城高等女学校へ通いました。１，２年生のうちはあまり軍事色を感じることなく，学校での授業や勉強にも楽しく取り組んでいました。

１年の夏には渥美の江比間に１週間泊まり，毎日泳ぎの訓練をしました。泳げない人が多かったですが，私は長篠小学校の時，夏休み前に泳ぎの訓練がありましたので，１時間続けて泳ぐことができました。女学校でも，桜淵で水泳訓練がありました。

勤労奉仕もあり，千郷の山村へ稲刈りに行ったことがあります。戦争でその家から出征された方が戦死された「誉の家」だったと思います。また，豊川海軍工廠の裏の松林を開墾したり，千郷の臼子の山へ薪を集めに行ったりしたこともありました。竹槍訓練もやった記憶があります。

○　学徒動員で海軍工廠へ

昭和１９年４月，学徒動員が始まりました。３年生は名古屋の中島飛行機製作所へ，私たち４年生は豊川海軍工廠に動員されることになりました。最初は正門近くの第１０．１１女子寄宿舎に入りました。大部屋で１０人がいっしょでした。私たちは，会計部の利材工場に配属されましたが，仕事はそんなに辛かった印象はありません。

昭 19 年　千郷村臼子の山で薪集め　貴美子さん提供

清水工廠長の娘さんでも火工部で油だらけになって働いていたのに，私たちは工員の手袋やズボンを繕ったり，大きな暗幕（灯火管制用）を縫ったりしていました。友達と話しながら仕事もでき，ミシンも一人一台ずつ使えて，結構楽しく働いてい

ましたから，他の職場より恵まれていたようです。洗濯物にアイロンをかけるおじさんがいて，学徒に優しくしてくれました。

休憩時間には，他の工場の様子を見に行ったりもしました。学徒をかわいがってくれたおかげか，会計部から呼ばれて封筒へ給料詰めを手伝うこともありました。学徒は給料がもらえなかったのでうらやましかったです。

工廠での服装は，桑の木の皮で織った服を着ていたように思います。男性の軍服のような服で，ズボンもありました。それを着て通っていたと思いますが，なぜか残っていないし，写真にも写っていないのが不思議です。

半年くらい過ぎた頃，第５．６寄宿舎に替わりました。寒い頃だったと思いますが，三河地震が夜明けにあり，びっくりしたことを思い出します。それ以前にも昼間に東南海地震があり，用水の水がこぼれるほどで歩けなかったことがありました。

昭和２０年になると，大都市がだんだん空襲されるようになり，不安な毎日でした。焼け出された方がいろいろな知人を頼り，疎開してきました。

戦争も激しくなったので，家から通える人は通勤することになりました。

昭 20.9.10 撮影　利材工場の級友と　貴美子さん提供

○　運命の８月７日

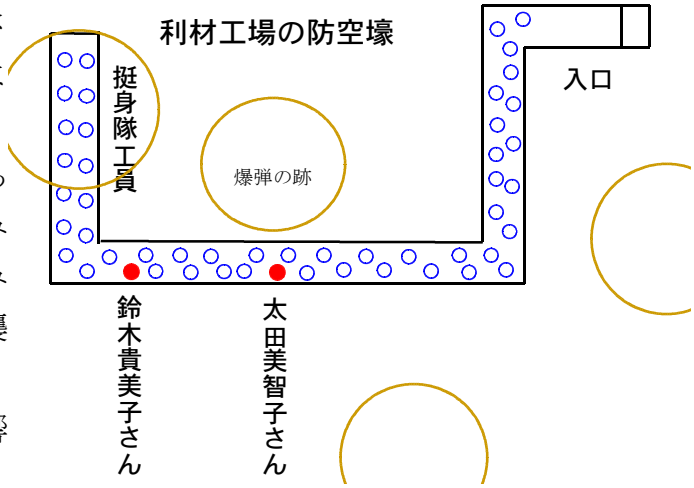
８月７日は，とても天気がよく暑い日でした。その頃は電車で通っていました。私は何だか行きたくないなと思って，もたもたしていたら電車に乗り遅れてしまいました。一つ後の電車で行くと，工廠へ着いたのが１０時ぐらいでした。その時は，駅から一人だったと思います。職場の利材工場に向かって歩いていると，まだ着くか着かないうちに警戒警報になりました。私はどうしていいか分からず立ちすくんでいると，すぐに空襲のサイレンが鳴りました。私は，カバンを背負ったまま急いで決められていた防空壕に入りました。

「入れ！入れ！」と係官に呼ばれて，会計部や他の工場の人たちもどんどん入ってきました。新城高女の太田美智子さんや他の友達も同じ防空壕に入っていたはずですが，大混乱で全然分かりませんでした。

あっという間に爆弾がどんどん落ちてきました。空襲は１０時１３分だったそうですから，私は空襲直前に工廠に入ったことになります。ほとんどの防空壕は，地面を掘って，上に板を乗せ，土をかぶせた程度のものでしたが，利材工場の防空壕は，以前の工場の基礎を利用したコンクリート造りで，他の防空壕とは違う

頑丈で立派なものでした。コの字形の５０人以上入れるような大きさで，電気が引かれ，土が落ちないように板張りされていました。

近くに２５０kg爆弾が何発も落ちました。ものすごい地響きです。みんな，目と耳を手で押さえてかがみ込みました。４回目か５回目の空襲で，そのうちの一発が，「ダーン！」と耳をつんざくような炸裂音と地響きをたてて落ちました。



体が吹き飛ぶような爆風，土煙が巻き起こり，息もできません。防空壕が直撃されたのです。「助けてー，助けてー！」という声が奥の方から２，３回聞こえてきました。でも，身動きもできずどうすることもできません。その声もすぐに聞こえなくなりました。私の３人ぐらい横の人が亡くなりました。近くにいた男の人が，「出るじゃないぞ，絶対出るじゃないぞ。死なばもろともだ。」と大声で叫びました。私は，「どうかここには落ちませんように。」と祈りました。もしも，その時に飛び出たら，私は死んでいたかもしれない，と今もつくづく思います。

空襲が終わったのか，やっと静かになったと思うと，もう防空壕には誰もいなくなっていました。みんな逃げるのはとても速かったです。外に出てみても，近くには誰もいなかったです。私だけとり残されたように感じました。私たちがいた防空壕の奥に，爆弾が直撃した跡がはっきり見えました。防空壕の回りにも五つぐらい大きな爆弾の穴があいていました。ほんの数メートル爆弾がずれていたら，私の命はなかったと思います。防空壕が頑丈だったおかげで真ん中の辺にいた人たちは助かったのです。利材工場は木造だったので，跡形もなく，何もなくなっていました。他の工場も見渡す限り何もなく，人もいませんでした。

後で分かったことですが，コの字型の奥の方に爆弾が落ち，１５，６人が亡くなったそうです。蒲郡の挺身隊の人たちでした。今でも顔や名前を思い出せる子が何人かいます。

私は，土が吹き飛ばされた丸太の橋（第３通用門）を渡りました。寄宿舎だった木造の建物は何もなくなっていました。気がついてみれば芋畑で，牛久保の近くでした。大勢の人がいましたが，新城高女や知っている人には会いませんでした。牛久保駅から電車に乗り，家に帰りました。

気づくと，もんぺの裏側がびろびろになっていました。爆風で破れたのだと思います。恥ずかしいと思いましたが，それどころではありません。家に着くと，母が，「よく帰ったなあ～。」と，ほこりまみれに汚れた私の体をさすりながら，

喜んでくれたことを思い出します。

２日か３日してから工廠へ行ってみましたが，誰も来ていませんでした。あれほどたくさんあった工場の建物で，残っていたのは工廠の東側と北側の方だけでした。そちらの方に行ってみると，食糧倉庫だったのか，中にはお米も油も砂糖もいっぱいありました。少しずつ分けてくれました。寄宿舎にいた時は，臭い豆ガスのごはんばかり炊いてくれましたが，お米もあったんだと思いました。

○　終戦後のこと

私たちは，昭和２０年３月２８日に女学校を卒業しましたが，実際には卒業式は行われず卒業証書も受け取ってはいません。そのまま専攻科へ入り，海軍工廠に続けて勤務しました。

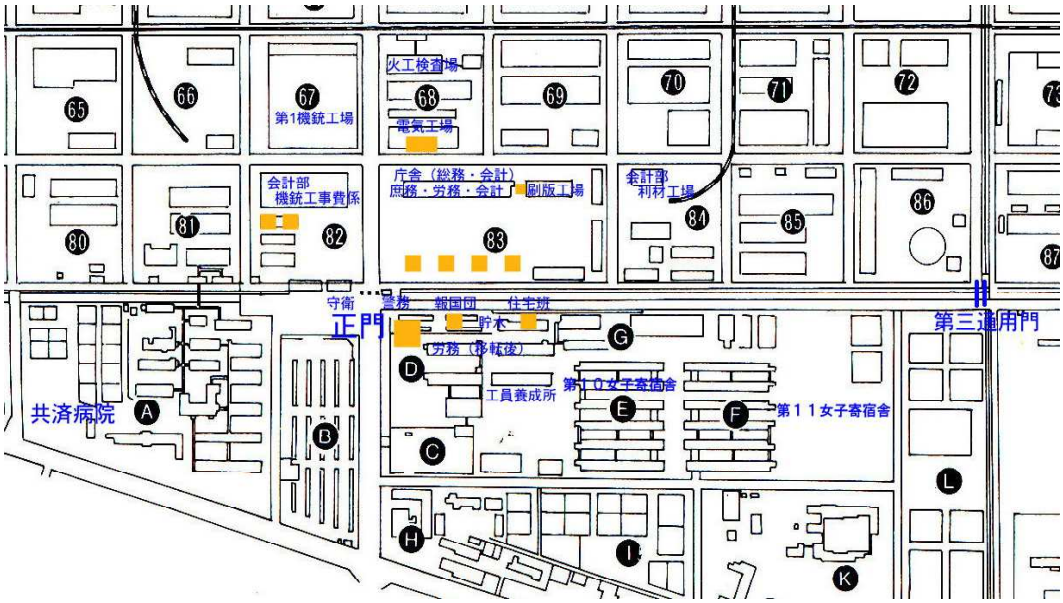
９月から専攻科の生徒として学校へもどりましたが，９月３０日に卒業した人（亡くなった２２名を含む）と，私のように再び学業に戻り，２１年３月２５日に卒業した人がいます。

防空壕跡　名大研究所敷地内

私たち３２回生は，否応なしに戦争に引き込まれ，勉学の機会を奪われ，大切な友を奪われました。子を奪われた親の姿も見てきました。私たちは，深く刻まれた傷を背負い，生きてきました。友を思い，どれほど多くの涙を流してきたかわかりません。

戦争が憎い。戦争をしてはいけない。戦争に近づいてはいけない。

これだけは若い皆さんに伝えておきたいです。



新城高女の皆さんが関係する職場配置図